

「中世鎌倉の建物と住まい」

講師 鈴木 亘さん（鎌倉市文化財専門委員）

2008年6月14日 於：鎌倉生涯学習センター

源頼朝は幕府を開いてのちの武家政権を作ったが、頼朝の祖先である頼義・義朝等、相当の勢力を持っていた先祖でさえ成し遂げられなかったことを、なぜ一介の流人の身分であった頼朝がなし遂げることができたか。当時の社会的状況と同時に頼朝以下の武将に、鎌倉に武家の政権をつくろうという機運がみなぎっていたために鎌倉幕府が創立したのだと思う。それが足利幕府、徳川幕府に受け継がれていくわけだ。歴史にあらわれる武将の話などは単独性が強いが、武家政権樹立には、人間の考える普遍的な要素があったのではないか。鎌倉のことを考えるときに、武家の館、それから、頼朝をはじめとして創立した社寺、また三代将軍以降の北条執権と禅宗寺院を考えなくてはならない。足利・徳川の時代を通じて、禅宗と武家の結びつきが非常に強い。建築を考えてみると、中世に新しく入ってきた宋・元の建築様式がいち早く鎌倉で取り入れられ、建長・円覚という大寺院を創立した。それがもとになって、南北朝以降、京都にも禅の大寺ができる。武家と禅の結合というべきか、禅宗というのは、宋・元（中国）の代表的な一つの文化であり、ひとつの体系を持っている。鎌倉は禅宗として、その中国文化をそっくり取り入れ、中世を通して武家独特の建築様式を確立していった。室町時代になると、禅そのものがかなり和様化してくる。特に足利義政以降、禅との結びつきが非常に強い建築をつくった。書院造という新しいスタイルの住宅ができた。これはまさに武家の文化である。そういう意味で、やはり鎌倉時代の武将が最初に取り入れた禅宗というのは、中世の鎌倉を考えるうえで大変重要なのだ。

黎明期の建築・・・鶴岡若宮八幡と荏柄社

鎌倉入りした頼朝は、大倉幕府を開いて、その西側にまず、頼義が石清水八幡宮を勧請した浜の鶴岡八幡、いわゆる若宮八幡を移す。それが鶴岡若宮で、現在の鶴岡八幡宮の発祥だ。最初の八幡宮は短期間に作ったので、翌年になると若宮の新しい造営を始める。本格的な建築を始めるにあたり、浅草の大工を呼び寄せて若宮を造営する。

草創期の鶴岡八幡若宮は『吾妻鏡』により、社殿の中心である神殿・拝殿、そのまわりを囲む回廊のほか、守護所、浜の大鳥居、若宮の鳥居、別当坊、末社熱田・三島社、流鏑馬の馬場、それに社殿の源平池と赤橋等ができていた。若宮は建久元年（1190）に鎌倉の火災により焼亡するが、

翌二年に復興する。このときに上・下両宮の構成になった。天正の「豊臣秀吉奉行等加判造営指図」でそれがうかがえる。

現在残っている中世の建物としては、2棟がある。

ひとつは指図の一番左上の恵比寿社で、北条時頼が勧請する。庶民信仰として恵比寿信仰があって大黒信仰と向い合せに配置をしてある。江戸時代に実朝を祀る白旗社となり、明治に実朝を白旗社に合祀するにあたって、現在の丸山稲荷のところに移築した。応永五年（1398）の建築である。

一方の荏柄社は、平安時代の後期、正治元年（1104）の誕生といわれている。大倉幕府を作ったときの鬼門の守護神。実際には、記録に出ているのは建仁二年（1202）9月、荏柄社祭礼のとき、大江広元が奉幣使になっている。鶴岡八幡宮とともに、歴代武将によって尊崇されて修理が加えられてきた。

配置を見よう。頼朝は武家政権を建てるときに、大倉幕府の西側に八幡大菩薩を祭り、東側のちょっと北に、菅原道真・天神様を祭った。雷との関係で、菅原道真というのは、人々の信仰を集めていた。非常に怖い雷神で、雨を降らす、農業の生業の神様だった。おそらく頼朝は、建久二年（1191）の火災のあとに、大倉幕府の鬼門の一段高いところに荏柄社を勧請したのではないか。現在の本殿は旧若宮の本殿を移築した。鎌倉で最も古い、鎌倉時代末の建物である。

政権確立期の建築・・・大倉幕府と永福寺

八幡宮の東側に頼朝は御所を造る。『吾妻鏡』では「御亭」として出てくるので、御所として形を整えるのは頼朝が征夷大將軍になってからだろう。敷地は東御門・西御門・南御門・北御門の内で相当広い。東西が320m、南北が210mという。地名も現在残っている。

敷地内（郭内）には、頼朝の御所の周りに「小御所」「東御所」という名前で妻政子や子供の棲む御所があり、さらに有力御家人の出仕のための休憩に使う邸宅があった。御所の中に侍所や厩があるのも、鎌倉の特長である。もちろん、各御門の外側に有力御家人の館があって御所を護っていた。これは京都の御所に見られない、鎌倉独特の將軍亭の在り方だ。残念ながら、鎌倉の大倉亭は調査がほとんど進んでないのでわかっていないが、今後に期待される。こ